和泉式部日記の引歌

石　埜　敬　子

1

帥宮と和泉式部が橘の花を仲立ちに消息を交わしあうようになって間もなく、日記は次のような一段を記している。（引用は三条西家旧蔵本を底本とする清水文雄氏校訂の岩波文庫による。尚、意の通じないところは応永本文を脇に付した。）

かくてしばしばのたまはする、御返も時々きこえさす。つれづれもすこしなぐさむ心ちしてすぐす。又御ふみあり。ことばなどすこしこまやかにて、

かたらはばなぐさむこともありやせんいふかひなくはおもはざらなん

あはれなる御ものがたりきこえさせに、くれにはいかゞ」とのたまはせたれば、

なぐさむときけばかたらまほしけれど身のうきことぞいふかひもなき

おひたるあしにて　かひなくや」ときこえつ。

橘の一件以後、故宮にゆかりの小舎人童を使者として積極的に消息を送ってくる宮に対し、時折返事をするといった関係で十日余りも経った頃のことであった。宮は初めて式部のもとに自ら訪れたいとの意向をほのめかしたのである。「話してもかいがないなどとは思わないでほしい」と呼びかける宮の歌に対し、式部は従来通りの拒絶の姿勢で歌を詠み返した。「……かたらまほしけれど」に一瞬相手を引きつけるポーズを取りながら、故弾正宮にとり残されて以来の憂きわが身を前面に打ち出して帥宮の申し出を阻もうとする。この身の深い歎きは、たとえどのように宮様がお慰めくださろうと甲斐のないことでございます、というのである。これだけならばこのやりとりは、平安時代のどこにでもみられる恋愛贈答歌ということになるだろう。しかしこの時式部は歌だけを返したのではなかった。下の句「身のうきことぞいふかひもなき」に関連させて「おひたるあしにてかひなくや」と添え書きしたのであった。「何ごとも言はれざりけりの身のうきはおひたる蘆のねのみ泣かれて」（古今六

帖・三・赤人〉の第四句に拠る表現である。この添え書きにより式部は返歌で言い切った拒否の言葉を弁解し、孤独と悲愁に泣き暮らす自分の立場を訴え告白したのである。宮様が嫌いなのではない、ただ涙にくれるだけの自分であるからという言いわけは、歌が持つ拒絶の意味を弱め、宮との語らいに心惹かれる己れをその一歩手前で辛うじて抑えている女の姿をいじらしく語っている。文を手にした宮はその夜式部のもとを訪れる。女が思いがけなく思うような折にとさえ思う。「おひたるあしにてかひなくや」は、複雑な式部の本心を伝えるのに十分の効果があっのだった。

二人は一夜を共にした。女の苦悩は大きい。故弾正宮との恋のときにも周囲の非難は烈しかった。まして故宮の一周忌も過ぎていない今、人もあろうにその弟宮との関わりにはまり込んでしまったわが身である。女の心は乱れに乱れる。「あやしかりける身のありさまかな、故宮のさばかりのたまはせしものを」という痛ましい反省は、一方で邸に出入りする小舎人童の姿に一喜一憂せずにはいられない女の生々しい心理と絡み合い、そんな自身の内側を凝視しながらも式部は宮に向かって自ら歌を詠みかけずにはいられなかった。「またましもかばかりこそはあらまし思ひもかけぬ今日の夕ぐれ」の歌の持つ表現の複雑さは、惑乱する自己を見据える極めて独詠的色彩の濃い贈歌であったからに違いない。宮は女をいとほしく思う。しかし立ち止まって自分を取りまく情況や式部にまつわる世評を思えば、やはり一途に溺れてゆくわけにもいかない恋愛であった。

くらきほどにぞ、御かへりある。

ひたぶるにまつともいはばやすらはでゆくべきものを君がいへぢに

おろかにやとおもふこそくるしけれ」とあるを、「なにか、こゝには、

かゝれどもおぼつかなくもおもほえずこれもむかしのさきこそあるらめ

とおもひ給ふれど、なぐさめずはつゆ」ときこえたり。

宮からの返事が、地の文で語られていた女へのいとほしみや、迷い、あるいはためらいといったものをそのまま記していない点に注意する必要がある。そんな帥宮の歌を受けた式部の方も、「またましも……」の歌が含んでいた混乱の思いから一転したように、悟った口をきく。「とんでもございません。私の方ではこのような状態でおりましても、別に心細いとも何とも思いませんわ。それと言いますのも、昔の縁で結ばれているからでございましょう」という。この歌は、形式的にも内容的にも宮の「ひたぶるに……」と贈答歌として一対をなしてはいないように思えるうえ、「昔の縁」が具体的には故宮との関係をさすのか前世からの宿縁をいうのかで解釈が分かれることもあって問題を残すが、日記が語ろうとしている女の思念と歌に詠じられた思いとの離れは指摘できる。ところで、そのように歌を詠んだ式部は、歌に添えてここでも又、「なぐさめずはつゆ」の一句を書かずにはいられなかった。傷つき、乱れ、

反省と自己嫌悪に自らを苛みながらもなお宮にすがらずにはいられない女の心が、「なぐさむる言の葉にだにかからずは今も消ぬべき露の命を」〈後撰・恋六・読人しらず〉に託されて吐露される。「式部は最後の一言で、これまでの強がりをかなぐり捨てたのである」[1]と評される所以だが、それは引歌による表現であった。

今一つ例をあげよう。

宮れいのしのびておはしまいたり。女さしもやはとおもふうちに、日ごろのおこなひに困じてうちまどろみたるほどに、かどをたゝくにききつくる人もなし。きこしめすことどもあれば、人のあるにやとおぼしめして、やをらかへらせ給ひて、つとめて、

あけざりしまきのとぐちにたちながらつらき心のためしとぞみしうきはこれにやと思ふも、あはれになん」とあり。よべおはしましけるなめりかし、心もなくねにける物かなと思ふ。御返、

いかでかはまきのとぐちをさしながらつらきこゝろのありなしをみん

おしはからせ給ふめるこそ。みせたらば」とあり。

宮の消息文中の「うきはこれにや」について諸注引歌があるかとする。尾崎知光氏は[2]「まぢかくてつらきを見るはうけれどもうきは物かは恋しきよりは」〈後撰・恋六・読人しらず〉をあてられるが、日記中の他の引歌のあり方からみて、引用歌の意味を全く介さずに語句だけをここに引いてきたとは考えにくい。具体的に歌を指摘できないのが残念であるが、式部の返事の中に「おしはからせ給ふめるこそ」とあることから察するに、あるいは女の心変りを恨む内容を持つ歌などであったのではなかろうか。物詣でから帰った式部を宮は秘かに訪れた。門を叩いても何日かの勤行に疲れて寝入ってしまった女の方では気づかない。平素から式部の男関係を耳にしている宮の心に「人のあるにや」との疑惑が生ずる。翌朝宮は女に歌を贈った。門を閉ざしたままであった薄情さを責めたのである。勿論心にわだかまる暗い疑惑をまともに歌に詠み込むようなことはしなかった。直接的な非難の感情は、最後の一言に確実にきっぱりと言い込めたのである。女の方では宮からの手紙で初めて昨夜の事情を知ったのだった。女は取り返しようのない後悔と落胆の思いをかみしめることになった。しかし返歌にはそうした感情を込めはしない。戸口を閉ざしたまま開けて入ってこようともなさずに、外からどうして私の心が薄情かどうかおわかりになるのでしょうと、見事に宮の歌に対してきりかえてみせたのだった。そして最後に「見せたらば」と付け加える。歌には歌を返さねばならない。しかし宮の心に自分への疑いが根ざしていることは否定しようのないものであることを式部は知っていた。弁明しなければならない。それが「見せたらば」（「人知れぬ心のうちを見せたらば今までつらき人はあらじな」〈拾遺・恋一・読人しらず〉）なのである。

2

和泉式部日記にみられる引歌としては、本歌取りの例も含めて三十数

ケ所がすでに指摘されている。中には典拠となる具体的な歌が明確にされていないものもあり、又、引歌をどのように定義するかによって数値が揺れるわけだが、他の日記文学と比較するときに格段に頻出度が高いことは確かである。ちなみに蜻蛉日記の引歌表現は五九例[3]、更級日記では一八例[4]認められることが報告されている。それでは和泉式部日記にみられる多くの引歌は、どのような形で日記に参与し、作品形成にどのような関わりを持っているのであろうか。本稿は日記内の引歌を具体的にみながら、その特質を考えようとするものである。

まず、和泉式部の中で、引歌のある位置をみてみる。（上に記したページ数は岩波文庫本に拠る。典拠不明のもの、問題点が指摘されているものもあるが、諸説を参考に一応引歌とみて妥当と考えうる範囲のものは全て抜き出し、問題の箇所については下に▲印を施した）

		帥宮	式部
息	和歌（本歌取り）	P・29 まつ山に…… P・61 月も見で…… P・78 ほどしらぬ…… P・20 うきはこれにや▲ P・22 たれもうき世をや▲ P・36 もの思ふ時は	P・21 しのぶらん…… P・30 君をこそ…… P・61 わがうへは…… P・75 さゆる夜の…… P・12 おひたるあしにて P・16 なぐさめずはつゆ P・20 みせたらば
消	消息文		
		P・40 うきたびごとに P・67 いさしらず P・68 思はましかば P・22 まちとるきしや P・22 かげにゐながら P・37 むべ人は	
話	古歌贈答	P・78 あな恋し…… P・79 恋しくは……	
会	対話	P・27 とりのねつらき P・52 そらゆく月 P・59 しほやきごろも P・10 われよりほかの▲ P・59 みてもなげく	
	独白	P・27 とりのねつらき P・32 人は草葉の露なれや P・10 むかしの人の P・62 風のまへなる▲	
心中思惟			P・21 身のあればこそ P・31 うらやましくも P・34 なぞもかく P・52 山のあなたに P・58 心やゆきて▲ P・66 いはほのなかこそすままほしけれ

一般に散文における引歌は、会話や消息に早く発達し、時代が下るにつれて地の文へ転移していったと言われている。[5] 山口博氏の調査によれ

ば、[6] 宇津保物語では会話中の引歌六五例、地の文一六例であるに比して、源氏物語は会話二六三例、地の文二六三例で、同率になっているという。宇津保物語の中で中将仲忠と女房兵衛が交わす会話、

兵衛「されば頼みきこゆる人もあらむかしな」中将「ここならではいづくをか」いらへ「されど、野にも山にもとこそいふなれ」中将「それはあらしならむや」兵衛「されど、間風とこそきこゆなれ」中将「されど今は皆こがらしになりにたりや」兵衛「むべこそは声の空にきこえけれ」中将「まづ先に立つとてなむ」兵衛「春ごろよりきこえざりつる御すきぞかし。いかでならむ」中将「秋霧の上にはいかがきこえざらむ」共衛「それが、はれずのみあらむこそみぐるしけれ」中将「そよや、つきせぬこそいとわびしけれ」兵衛「宿かす人はあらむを、あいなき御事なりやなどなむ」中将「……」〈初秋〉

などは、一つの極端な例であろうが、丁々発止とばかり受けては返す機智に富んだ小気味よいやりとりは、当時の日常会話の一端をうかがわせるものと考えてよかろう。それは消息文においては美文意識につながり、やがて仮名散文による創作活動と相俟って、積極的に古歌を取り入れた独得の美文調を生み出していったことが想像される。蜻蛉日記中巻の登子と道綱母の交信にみられる「山の住まひは、秋のけしきも見給へむとせしに、また憂き時の休らひにて、中空になむ。繁さは知る人もなしとこそ思う給へしか……」といった引歌のあり方が、下巻に散見する「あるところに忍びて思ひ立つ。なにばかり深くもあらずといふべき所なり。野焼などするころの花はあやしうおそき頃なれば、をしかるべき道なれどまだし。いと奥山は鳥の声もせぬものなりければ、鶯だにおとせず、水のみぞめづらかなるさまに湧きかへり流れたる。」〈天延二年二月〉といった文章を容易に可能にしていったのではないかと考えられるのである。こうした傾向は源氏物語を頂点として、後期の作品になると又別の方向を探り出していったようであるが、[7] 散文における引歌表現は、修飾的情趣的美文への意識の高まりと切り離しては考えられないのである。

さて、和泉式部日記であるが、源氏物語をやや上回る頻出度を持ちながら、先の表からもわかるようにいわゆる地の文に用いられた例は一つも見あたらない。勿論日記そのものが一二五首の贈答歌を中心に構成されている点を無視するわけにはいかない。地の文と呼ばるべき部分が極めて少ないばかりでなく、地の文そのものも贈答歌や消息の繋ぎ的性格が強いということは十分考慮されねばならないだろう。しかし、例えば式部が手習いとして書いたことになっている「暁起きの文」と称される歌的情趣にあふれた美文にも引歌表現が一例も認められないことは、やはり日記の引歌に対する一つの態度を語っているとみてよいのではないかと思われる。また、数多く用例をもつ消息文内の引歌も、先にあげた道綱母の消息にみられる引歌のあり方とは全く異質なものであることに気づく。結論的に言うならば、和泉式部日記中の引歌は、情趣あふれる美文を形成するために用いられたものではなかった。それは、式部と宮の心の動き、及び二人の歌というものに対する認識のあり方と深く関わりあって存在していたように思われるのである。

3

日記を読んでゆくと、しばしば次のような表現に目がとまる。

a、ならはぬつれづれのわりなくおぼゆるに、はかなきこともめとゞまりて……

b、あはれはかなく、たのむべくもなきかやうのはかなし事に、世のなかをなぐさめてあるも、うちおもへばあさましう。

c、をりすぐし給はぬををかしとおもふ。

d、（歌の贈答四回）……などいふ程に、れいのつれ〴〵なぐさめてすぐすぞ、いとはかなきや。

aでいう「はかなきこと」は、具体的にはその時式部のもとに届けられたばかりの帥宮の歌「うちいででもありにしものを中々にくるしきまでもなげくけふかな」をさす。式部への愛を訴えかけてくる宮の歌が全て嘘であったわけではなかろう。しかしこの時点における宮の愛が文字通り「くるしきまでになげく」程深刻なものであったかどうか。式部は有頂天に宮の言葉を信じてはいない。「はかなしごと」だというのである。bの「たのむべくもなきかやうのはかなし事」も、訪れの途絶えた宮との歌の贈答をいう。式部にとって歌は常に「はかなきこと」「はかなしごと」でしかないという諦念があった。「うちいででも……」という宮の歌を「はかなきこと」と言いきった彼女は、歌、わけても男女の間にとりかわされる贈答歌が、恋をテーマとする一種の虚構の上に成り立っていることを自覚していたと言えるだろう。そうした認識があるからこそ、cやdにみる如く折を得た歌の贈答につれづれを慰めることができたのでもあった。

先にも見たが、日記において、求愛や拒絶の歌は、散文部分の叙述との間に微妙なくいちがいをみせている。四月の最後の日、女は「ほとゝぎすよにかくれたる忍び音をいつかはきかんけふも過ぎなば」と呼びかけ、宮は「忍び音はくるしきものをほとゝぎすこだかき声をけふよりは聞け」と誘らしく歌い返してきた。時鳥の忍び音を主題に詠み交わされた二首の贈答歌は季節感に裏打ちされた見事な応酬であり、機智と緊張をはらんだ男女の恋を歌い尽くしている。だが「今までは時鳥の忍び音になぞらえて控えていた。しかし五月になったのだ。今日からは人目もかまわず大ぴらにあなたの所に通おう」という宮の歌のあとに日記は「……とて、二三日ありて忍びてわたらせ給へり」と記している。歌の思いが真実であるなら、宮はその日堂々と式部を訪れてよい筈であった。地の文は皮肉にも宮の歌の虚構性を映し出してしまっている。しかしだからといって女はそのことによって宮を微塵も咎めはしないのである。

次のような場合もある。宮は女を訪れたが、女の方は物詣でに出かけるための精進中とて逢うこともせず宮を帰してしまった。

つとめて、「めづらかにてあかしつる」などのたまはせて、

いさやまだかゝるみちをばしらぬかなあひてもあはであかすものとは

あさましく」とあり。さぞあさましきやうにおぼしつゝんといとほしくて、

よとともに物おもふ人はよるとてもうちとけてめのあふ時もなしめづらかにもおもう給へず」ときこえつ。

女は昨夜帰してしまった宮を「いとほしく」思っている。だからすぐに返歌をしたという。「目の合ふ」に「妻の逢ふ」の意を懸け、宮の詠んできた「逢ふ」を「合ふ」にあえて取りかえて、宮の歌にきりかえしたものであった。いとおしい感情と歌の意味するところの離れに注意したい。文脈の上から「いとほしくて」は「きこえつ」にかかるのである。折を得た才気あふれる歌の贈答、その行為を通してお互いの心が豊かに通いあいつれづれが慰められる――そんな愛の姿が垣間見られよう。

久保木哲夫氏は、平安朝の贈答歌の返歌の仕方には「型」が認められると言われ、

① 返歌は贈歌の内容を受け、それをかならず表現の中にもりこむ。それが徹底すれば、贈歌に用いられている語を、ぬかりなく返歌の中でも用いるということになる。

② 返歌の対応の仕方は、贈歌の言わんとすることに対して、あまりすなおな言い方をしない。すなわち「いひあらそえる」型をとる。

の二点をあげておられる。[8] 個々の事情により差異はあるだろうが、日常生活における贈答歌が折とか場に重きを置いた会話的性格を強く有していた以上、こうした「型」を踏まえた遊戯性を否定することはできない。むしろ見事に型を踏まえた歌こそ、才気あふれる返歌として人々の賞讃を得ていたのではないかと思われる。式部が天性の歌人であったにしろ、当時の贈答歌が持つ遊戯性から逃れることはできなかったであろうし、天性の歌人であるが故に却って知的な緊張感をもたらす心の交流の醍醐味を楽しんでいたにちがいない。しかし一方、そうして交わされる歌に対して人一倍もどかしさも感じていたのではなかろうか。それは帥宮にとっても同じことだったと思われる。はじめは歌の詠じあいによって次第に高揚され深められていった二人の愛が、真剣なものになっていったとき、歌の贈答だけでは表現しきれない心のあり方が意識されたにちがいない。そしてそれは引歌に託されることによって確認され、確保されていったと見るべきではないだろうか。更に言うならば、歌に直言しえない自己の感動は、引歌という表現方法によって、意味のすりかえや曖昧さを許さない決定的な重みをもって確実に相手の心へ響いていくことができたのではなかったかと思うのである。冒頭に記した三つの例も、そうした意味を持つものであった。引歌の意味するところは自作の歌以上に真実の思いを伝達するものとして、宮の心を打ち式部の心をなごませたにちがいない。

それは別の場においては、言いにくいことを言う手段でもあった。更級日記の中に、離別した後も孝標の任国であった上総の名を女房名として使っている継母に対し、父に頼まれた作者が「朝倉やいまは雲井にきくものを猶木のまろがなのりをやする」と更級日記の作者としては珍らしい本歌取りの歌を詠み贈っている例がみえるが、和泉式部日記にみる次の例などは、二人にとっての引歌の重みを十分に語っている段である。

宮より御文あり。みれば、「さりともとたのみけるがをこなる」など、おほくのことどもの給はせで「いさしらず」とばかりあるに、むねうちつぶれてあさましうおぼゆ。めづらかなるそらごとどもいとおほくいでくれど、さはれ、なからんことはいかゞせんとおぼえてすぐしつるを、これはまめやかにのたまはせたれば、思ひたつことさへほのききつる人もあべかめりつるを、をこなるめをもみるべかめるかなと思ふにかなしく、御返きこえんものともおぼえず。又いかなる事きこしめしたるにかと思ふにはづかしうて、御かへりもきこえさせねば……

突然の宮からの手紙であった。しかもこの手紙にはいつもの歌が書かれていない。それだけでも異常であると女は直感したに違いない。手紙の文面はとみれば、ひどく簡単である。「まさかそんなことはと思ってあなたを信じていたのが愚かであった」とだけあり、続けて、「いさしらず」と書かれていた。古今集に載る在原元方の歌「人はいさ我はなき名のをしければ昔も今もしらずとを言はむ」を引いていることは疑いようがない。式部は驚いた。宮は一体何をお知りになったというのか。以前にもこれに似たような疑いをかけられたことがないわけではなかった。しかし今度の場合はそれらとは違うらしい。何故なら宮が「まめやかにのたまはせ」ていられるからだ。はかなしごとの歌でこちらの様子を探ったり愛想尽かしをしていないことが何より恐ろしく女には思われたにちがいない。かりに宮が疑惑や不快な思いを歌の形で言い寄こしてきたのであったなら、例によって式部は軽くいなしてみせたり、とぼけたり、あるいは強い調子できりかえすことができたであろう。しかし、引歌の持つ真実性が式部にそうした態度を許さなかったのである。深刻に思い乱れた女は、ついに返事を送ることができなかった。この一事は、結局、いつまでも宮邸入りをためらう女の決意を促すために宮がおからかいになったのだろうという女側からの解釈で落ち着きを取り戻してゆくわけだが、引歌の文を送る側も受ける側も、それが心にある思いを真摯に伝えるものであることを了解しあっているところに成り立った戯れであったといえる。

宮邸に入ることの不安をさりげなく「みても嘆く」（「みても又またもみまくのほしければ馴るるを人はいとふべらなり」〈古今・恋五、読人しらず〉）と訴えた式部に対し「よし、みたまへ。しほやきごろもにてぞあらん」（「伊勢のあまの塩焼衣馴れてこそ人の恋しきことも知らるれ」〈古今六帖〉）とやさしく受けた見事なやりとりも、機智にあふれた会話の裏に、恋を全うできるか否かにかけられた真剣な心を読み取ることができる。この会話に続く一場面で、女の眼が日記の中でも最も美しい宮の姿を捉えていることを考えあわせると、引歌が、自作歌のやりとりとは異なった次元での交流を可能にし、そこに込められた心情が日記の展開に大きく関わっていることを知るのである。

4

以上の如く、和泉式部日記における引歌が多くの真実の心を語る言葉として交わされてきたことを考えると、日記中にみられる古歌贈答も、

当然その延長線上に捉えられるべきであろう。

ひるつかた御ふみあり。みれば

あな恋しいまもみてしが山がつのかきほにさけるやまとなでしこ

「あなものぐるほし」といはれて

恋しくはきても見よかしちはやぶる神のいさむるみちならなくに

ときこえたれば、うちゑませ給ひて御らむず。

このあたり、日記の主流である「忍びの恋」系の素材と、宮の道心にかかわる素材が交錯して配列されているとみる考え方がある。(9) その場合、古歌贈答の部分は「忍びの恋」系列にみなされ、すぐ前に描かれている宮の出家の意志表示が引きおこした波瀾部分との続き具合が無造作であって、二つの素材が全く関係ない形で配置されているにすぎないとの批評を受けるわけだが、それではなぜ宮は式部に対してわざわざ古今集の歌を贈ったのだろうか、その必然性の説明に窮することになろう。頃は冬の真中であり、常夏の季節に花に添えて贈ってきたわけではないのである。ふと宮の口から出た出家への思いは式部を激しく動揺させた。「ものも聞えでつくづくと泣く気色」「さらにいかにせましなど思ひ乱れて」「もののみあはれにおぼえ嘆きのみせらる」といった叙述や、不安に耐えかねたように詠まれた二首重ねの贈歌は、その折の式部の動揺を語っている。宮からはすぐにいたわりと慰めの返歌二首が返されたが、女の心は不安を消すことはできなかった。そこに届けられたのが「あな恋し……」の古歌であったことに注意すべきであろう。自分の道心を語ったことが女にどれ程残酷な動揺を与えてしまったかに気づいた宮は古歌一首を贈るという思いきった手段で気持を伝えてきたのである。「あな物狂ほし」という女の感想は、単に宮の凝った愛の表現の仕方や情熱的な愛着のあり方に向けられたものではなかろう。恥じらいと安堵の思いが式部に「あな物狂ほし」と呟かせたのではなかったか。自分を取り戻した式部は伊勢物語中の一首をもって宮の歌に答えたが、それは贈歌の用語を使いながら内容的には相手にきりかえすという、まさに贈答歌の「型」を見事に踏まえたものであった。女の心の動きをみる上でまことに興味深く思われる。

寛弘七年正月二日、道長は孫である若宮をのぞき込みながら、「野辺に小松のなかりせば」と誦したという。紫式部はその記事のあとに、「新しからんことよりも、折ふしの、人の有様、めでたく覚えさせ給ふ」と記している。折にかないその場の雰囲気にふさわしいものならば古歌は自作の新しい歌以上の効果をあらわすというのが紫式部の実生活の中での引歌観であったとみてよかろう。源氏物語空蟬巻の最後は、そうした引歌の効果を心にくいまでに計算して書かれたものと言えるわけで、独詠歌では露わになりすぎる抑えられた心情が古歌に託されるとき、空蟬の胸に余る思いの激しさに読者は感動する。本歌取りの歌が二重構造の世界を持つと同じように、引歌の贈答や独白は古歌の持つ世界と引用者の現状が重なりあい、自作歌とちがった広がり、余韻を享受者に与え、古歌の中に抑え込まれた真実の思いは増幅されて伝達されるというパラドックスが認められてよいのではなかろうか。和泉式部日記の引歌がまさにそうしたものであったと思うのである。

純粋な独詠歌を一首も持たない和泉式部日記の中で引歌の持つ意味は大きい。自作説他作説の観点から言えば、心中思惟の中にあらわれる引歌表現が全て式部の側だけにみられること、独白中にみえる宮の二例の引歌が結果としていずれも式部の耳に届いているのに対し式部の方の独白は全く一人の場での呟きであることなど、又別に興味深い問題を含んでいるが、自作歌と引歌との微妙な関係や歌に対する認識のあり方といった点に限っても作者はやはり和泉式部自身と考える方が妥当であるように思われる。歌人であるが故に鋭く自作歌の虚構・ポーズを直感し、又歌のすぐれた享受者として古歌を自己の内に肉化し、再生し、用いたのが和泉式部日記の引歌ではなかったろうか。「なにごとも言はばなべてになりぬらし　音に泣きてこそ見せまほしけれ」と歌う絶望的な言語認識と、それでも尚三十一文字の中に自分の存在を詠じ込めずにはいられなかった式部の姿勢が、日記の中に垣間見られるように思われるのである。

注

(1) 円地文子・鈴木一雄「全講和泉式部日記」（至文堂）
(2) 「和泉式部日記考注」（文京書院）
(3) 村川和子「狭衣物語における引歌の一考察」（実践文学　四二号）
(4) 和田律子「『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『狭衣物語』の引歌について」（日本文学　第三十七号）
(5) 原田芳起「宇津保物語における引歌――宇津保物語の言語と文体㈣――」（平安文学研究　第三十七輯）
(6) 「源氏物語の引歌」（源氏物語講座　第七巻）
(7) 注2に同じ
(8) 「平安期における贈答歌」（和歌文学の世界　第一集）
(9) 注1に同じ